English Education

どう変わる？
どう備える？

5年後の英語教育

第②回

「完璧な英語」より、生徒がアクティブに取り組む授業を

前号では、中学生の英語力が文部科学省の目標とは大きな隔たりがあること、教員は言語活動の必要性を理解しながらも、授業で十分行えずにいることが課題であると紹介した。では、どのようにすれば、英語の４技能を育む指導に転換できるのだろうか。根岸先生にそのポイントを聞いた。

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授 **根岸雅史**

ねぎし・まさし◎東京外国語大学卒業後、東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了、レディング大学大学院言語学研究科修士課程修了。レディング大学より博士号取得。専門は英語教育学、言語テスト、言語能力評価枠組み。公立高校講師、東京外国語大学助手などを経て、現職。主な著書に『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』（共著、大修館書店）など。

授業中に生徒一人ひとりが英語で言語処理をしているか

英語の４技能を育むための授業として、私が最も重視すべきだと考えるのは、生徒一人ひとりがアクティブに英語で言語処理を行えるようにすることです。英語を聞いて、読んで、その内容をイメージする。または、自分の言いたいことを考え、それを英語で書いたり話したりして言語化する。これら一連の過程を即興的に繰り返し行うことによって、英語４技能は身についていくからです。

授業では、先生方が様々に工夫して言語活動を行っていると思いますが、それらの活動は、生徒がその場で考えて、英語で言語処理をする内容となっているでしょうか。例えば、生徒が教科書を音読し、和訳する場面では、指名された生徒以外は発表を聞いているだけです。もしかしたら、指名された生徒でさえ、予習してきた和訳をただ読み上げているだけかもしれません。一方、少人数のグループで教科書を読み、そのトピックスについて英語で話し合い、意見をまとめて発表する活動では、どの生徒も英語を聞き、話すことになります。この前者と後者の活動をそれぞれ続けたら、卒業時の英語力にどのような差がつくかは明白です。

「完璧な英語でなければ」という思い込みを捨てる

特に「書く力」「話す力」は、他の成績にあまり関係なく、書いて話す量に影響されることが、様々な調査から分かっています。実際、日常的に英文を書く活動をしている中学校で、留学生のスピーチの要旨を英文にまとめさせたところ、英語の成績が下位の生徒でも10行以上は書き、スペリングや文法のミスはあっても、内容的には充分なものでした。

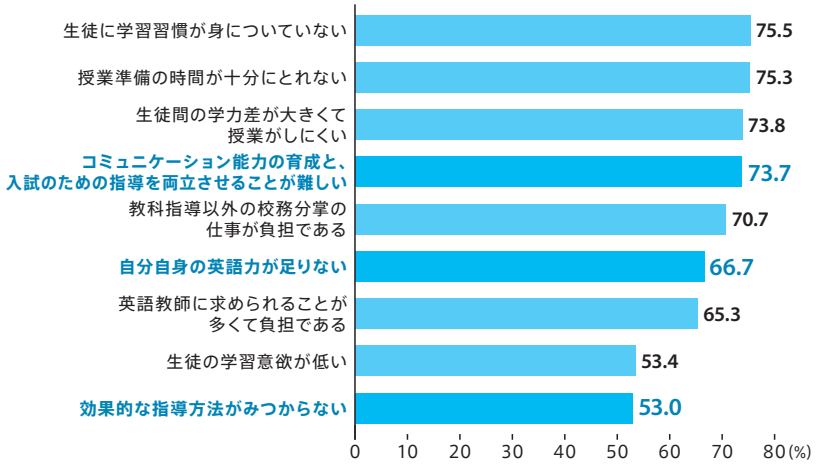
英作文を指導する上で、大変なこととしてよく挙げられるのが「添削」です。しかし、先生が丁寧に添削しても、赤が多ければ、かえって生徒は意欲を失うだけです。それよりも、たくさん書かせることを重視して、内容を読んで励ましの言葉を書くなど、生徒に次も書こうという意欲を持たせる方が大切です。また、学期に１回、イベント的に英字新聞を制作させるよりも、間違ってもよいから毎日少しずつでも書かせる方が、書く力ははるかに伸びていきます。

「話す力」の指導も同様に、量を増やすことが大切です。話す際には、内容を決め、それらを言語化し、音声化します。日本人は母語でも議論が得意とは言い難いですから、英語であればなおさら大変です。だからこそ、予習してきた英文を読み上げるのではなく、考えながら話す練習を積むことに意味があります。ただ、即興的であればあるほど、単語の羅列だったり、文法がめちゃくちゃだったりと、言葉はたどたどしくなってしまいます。しかし、そうした事態を避けるために、話す活動を控えているのであれば本末転倒です。

言語の習得過程では、たどたどしいやりとりをする段階が欠かせません。完璧な英語を書いたり、話したりしなければならないという思い込みを捨て、授業は試行錯誤しながら、時には失敗も披露する場であるという意識への転換が必要だと思います。

もう１つ、意識の転換が必要だと

図１　英語指導に関する悩み（中学校教員）



＊「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％。上位９項目を抜粋。
出典／ベネッセ教育総合研究所「中高の英語指導に関する実態調査 2015」

図２　受けたい研修（中学校教員）

「話す力」の指導方法	58.0％
「書く力」の指導方法	53.5％
技能統合型の指導方法	52.3％
言語活動の進め方	46.7％
教科書の活用方法	44.0％

＊複数回答。上位５項目を抜粋。
出典／ベネッセ教育総合研究所「中高の英語指導に関する実態調査 2015」

考えるのは、入試指導との兼ね合いです。先生方の指導に関する悩みの上位には「コミュニケーション能力の育成と、入試のための指導を両立させることが難しい」が入っています（**図１**）。しかし、英語力という幹がしっかり育っていないところに、入試テクニックなどの枝葉を育てようとしても身につくものではありません。幹の成長には時間がかかりますから、１年生から英語の４技能を育成していき、入試に必要なノウハウは３年生の後半あたりから指導すればよいのではないでしょうか。

英語力を伸ばす研修と指導法の研修の２本立てに

先生方がそうした指導を行えるように、研修内容を今一度、見直すとよいかもしれません。前号で述べた通り、英検準１級相当の力を持つ中学校教員は３割弱で、多くが英検２級相当と思われます。英語力はすぐに伸びるものではありませんから、英語力を伸ばす研修とセットで、今の英語力で４技能を指導するための研修も行うとよいと思います。実際、教員は、自身の英語力不足に悩むとともに、「話す力」「書く力」の指導法を知りたいと思っています（**図２**）。

研修は多くても年に数回ですから、英語力を伸ばす研修では、ＴＯＥＩＣ対策のような講座だけでなく、先生方が日常的に自己研鑽を積める学習法を伝えることが大切です。例えば、各自の学習法を紹介し合うグループワークを行えば、多様なノウハウを得られます。その中から自分に合う方法を選んで行えばよいでしょう。

指導法の研修では、たどたどしいやりとりでもよいという発想への転換を促すとともに、４技能を育む授業とはどういうものかを模擬授業などで示し、そうした指導に必要なノウハウを学べるようにすれば、先生方も授業の進め方をイメージしやすくなります。多くの教員は、自身の学生時代に「書く」「話す」指導をあまり受けていませんから、指導例を具体的に示すことが大切です。

また、授業を英語で進める際、説明や指示、コメントなど、使うタスクは決まってきます。指示が通じない時にはどうすればよいのか、褒める時や励ます時にどのようなコメントがふさわしいか、生徒の英語力が上がってきたら、どのような言い回しにすると生徒は手応えを感じられるかなど、場面に応じて使い分けられるような研修を行えば、今の英語力でも指導の幅は広げられます。

教科書を十分に活用しているかも問いかけてみてください。教科書には、書く活動や話す活動を行うページがあります。それに則して進めれば、指導のポイントをつかめるようになるでしょう。

今後の課題として、授業を変えるのであれば、予習や復習との整合性にも目を向けてほしいと思います。単語調べや英文和訳ばかりでなく、言語活動主体の授業を行うなら、活動で何を話すのかを考えたり、教科書のトピックスに関連する事項を調べたりという課題の方が、授業を活性化させるのではないでしょうか。

また、授業を変えるのならば、定期考査などのテストも、授業でねらったことを評価する内容に変える必要があるでしょう。それについては次号でお話ししたいと思います。

根岸先生からの提言

1. 生徒一人ひとりが、アクティブに英語で言語処理を行う授業になっているかを見直す。
2. 間違っても、たどたどしくてもよいから、「書く」「話す」量を増やす。
3. 教科書にある、書く活動や話す活動のページを十分に活用する。